8.9

夏季大学ノート

中国問題を考える

中嶋嶺雄（なかじまみねお）

中国と日本の関係は、一口に同文同種と呼ばれる。これは大変、危険なことだ。むしろ私は同文同種より、アジアの異母兄弟と見るべきだと考える。それなりに共通性はある。だが、逆に対立しやすく、近親的な難しさがある。今後、両国が共存して行くうえでは、一時の甘いムードとか、ひとりよがりではうまくいかない。

同じ根源を持ちながら、中国と日本ではかなり違いがある。例えば三島事件。そのとき私はたまま香港にいた。イギリス人らは"ハラキリ"として、美学どころか野蛮な行為としか受け取らない。そこで私は中国人はもっと別のところでこの事件を理解していると考えた。現に中国には切腹を意味する屍諫（しかん）とかいった言葉だってある。三島が信じていた陽明学にしても中国の哲学だ。

ところが、だれ一人としてそういった理解を示さない。つまりは"北京"の言うように『日本軍国主義復活の生きたあかし』ということになってしまう。陽明学にしても中国人は実践と認識を無理やり一致させるようなことはしない。矛盾は矛盾として残し、日本人のようにギリギリのところまで突き詰めない。

文化大革命は日本で考える以上に熱狂的なものだった。それが冷静に観察すると、その熱狂の中でニヒルに突き放したところがあることを感じさせられた。中国人と日本人は政治に対して本能的に感覚が異なる。だいたい日本人は政治に過大な期待をかける。中国人は違う。政治の限界はここまでで、これから先は政治に期待出来ないというようなところがある。

文化大革命はむしろ政治不信の逆説的裏返しであるとも解釈される。旗が振れたからついていったまでのこと。これは中国人の伝統的な体質である。そしていま中国では脱文化革命の現象が起きている。どうやら毛沢東は革命を急ぎ過ぎたようで、実権の定着にも疑問がある。

毛沢東は確かに窮地に立った時はユニークな能力を発揮する。現に独自の発想で彼なりの政治を作り出した。だが、問題は権力を確立したあとをどうするかということだ。そこで日本はかつての中国共産党のイメージで中国を一方的に美化、理想化していると、林彪事件もなにも理解出来なくなる。

日本人は罪悪感、贖（しょく）罪感から中国を見ようとする考え方が根強い。でも中国人はもうそんなことは欲してないようだ。このあたりで視点を変え、クールに突き放して見直す必要があるので はないか。林彪事件にしても中国人はそれほど驚いていないと思う。面従腹背が中国人の伝統的体質であり、実利的、功利的と考えてもよい。こう見てくると、中国が急に日本に柔軟姿勢を見せて来たことも不思議ではない。

中国が柔軟姿勢になったことにはそれなりの事情があると考えられる。ではその事情とはなにか。脱文化革命の動きが著しくこれまでのような姿勢ではいかなくなった。ある中国人に『最後に笑う人は周恩来だ』と言われて、ドキリとしたことがある。現に周恩来に近い人が次々に表面に出ており、これが第一の事情だ。

第二に中国が国家外交を推進しようということがはっきりした。これまで、弱者や被抑圧者を支援するのが中国だった。それが弱小国のチャンピオンではなくなり、国益面からも外交を重視するようになった。それからソ連が中国を包み込むように勢力を南に伸ばしており、これをかなり気にしているようだ。

中国には経済建設を一日も遅らせないという要請がある。本格的な開発、テークオフはこれからで、毛沢東の革命思想では大衆はますます面従腹背の様相を強める。これを一番よく知っているのが周恩来だろう。これまでの友好商社から、大手商社に接近しようとしているところなどからも、そうした事情はうかがえる。

こうしたところが中国が日本に接近して来た事情と考えられるが、どうも日本人はウエットに対応しやすい。下手をすると、中国の国益が日本の政財界の利害との中に収斂（しゅうれん）されてしまう危険性がある。夢よもう一度——という幻想で中国に出て行けば、それこそ日本帝国主義の再侵略ということにもなりかねない。

米中関係と日中関係は基本的に次元が違う。アメリカは比較的由にバスに乗り降り出来るが、国と日本はもともと異母兄弟として同じバスに乗っている。そのために今後もずっと同じバスに乗ってゆくための、確固としたルールを打ち立てなければならない。これは単に時間的にでなく、質の問題としてとらえるべきだろう。

次に日中関係を広い国際的視の中でとらえるべきだと考える今日のアジア諸国は、大国の利によって踏みにじられるのはごんだ——という自覚をしているエコノミックアニマルの姿勢で国にらがえするというのでは疑惑、不信は強まる。これらのとを踏まえて冷厳に話し合えば道は開けると思う。

（東京外大助教授＝七日夜の講演から）

から結局金を与えている。

私はその光景をそばで見ていて映画館にわかりもしない子どもを連れてくるという神経さえさることながら、どもの欲望をそのまま直線に満たしてやるその母親の責任ぶりにあきれてしま